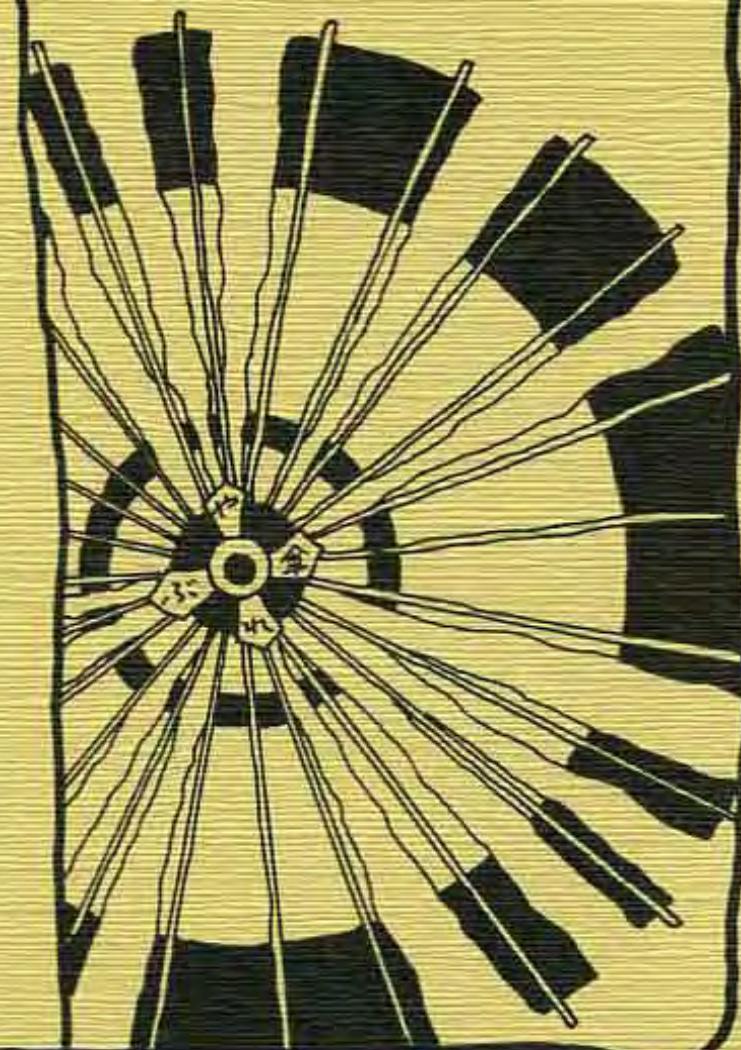


やぶれ傘



九十五号
二〇一七年四月

通らせてもらふ校庭土佐水木
白梅の辺りに闇の来てゐたる
県道に出ればコンビニ春めけり
春の海大桟橋の突端の
川風の届くところに雪柳
桃の花咲いて青空駐車場
踏切があり草あをむ土手の道
町中の蕎麦屋の卓の野火埃
チヤイム鳴るもう降り出して春の雨
ひとしめり来て明け方の暖かき
朝市の七輪に焼く目刺かな
見せくれし馬穴の中の蛸蚪の紐
目ん玉はパスタの上のしらすにも
春眠の耳に社の鈴の音
向かひ家は鎖されしままに春落葉
春一一番胸のつかへを落としけり
別れ行く日の学び舎に春時雨
雛の顔皆ふくよかに緋毛氈
枝垂れ梅柴犬の背に触れにけり
灯はあれど足跡見えぬ雪の家
梅真白史跡の家に住む人も
バイエルのピアノの稽古ミモザ咲く
土手青む犬は行つたり來たりして
葉牡丹を端正に植ゑ逝きにけり
指長き仏足石や下萌ゆる
青空に煙ひとすじ山笑ふ
庭闈に夜半に降りたる雪の跡
まんざくのもじやもじや咲けり空のあを
根橋宏次
きくちきみえ
大島英昭
丑久保勲
廣瀬雅男
渡邊孝彦
瀬島酒望
青谷小枝
安藤久美子
藤井美晴
菊池洋子
天野美登里
小山陽子
白石正躬
秋山信行
春一一番胸のつかへを落としけり
別れ行く日の学び舎に春時雨
雛の顔皆ふくよかに緋毛氈
枝垂れ梅柴犬の背に触れにけり
灯はあれど足跡見えぬ雪の家
梅真白史跡の家に住む人も
バイエルのピアノの稽古ミモザ咲く
土手青む犬は行つたり來たりして
葉牡丹を端正に植ゑ逝きにけり
指長き仏足石や下萌ゆる
青空に煙ひとすじ山笑ふ
庭闈に夜半に降りたる雪の跡
まんざくのもじやもじや咲けり空のあを

抄集句選 紀大崎夫

春一番胸のつかへを落としけり
別れ行く日の学び舎に春時雨
雛の顔皆ふくよかに緋毛氈
枝垂れ梅柴犬の背に触れにけり
灯はあれど足跡見えぬ雪の家
梅真白史跡の家に住む人も
バイエルのピアノの稽古ミモザ咲く
土手青む犬は行つたり來たりして
葉牡丹を端正に植ゑ逝きにけり
指長き仏足石や下萌ゆる
青空に煙ひとすじ山笑ふ
庭闈に夜半に降りたる雪の跡
まんざくのもじやもじや咲けり空のあを
久世孝雄
有賀昌子
松村光典
山本久枝
石塚清文
石原健二
岩藤礼子
岡田香緒里
神山市実
黒澤次郎
眞田忠雄
貫井照子
野口希代志
濱野新
森美佐子

たんぽぽ

大崎紀夫

春の日のきらりきらりと蛇口の背
茨線と杭と真昼のたんぽぽと
盆梅のかをりは廊下曲るまで
目刺し焼くガスの火絞りまた絞り
積まれたる丸太を蝶の越えにけり

盆地より風抜けてゆく牡丹の芽
春の昼倉庫の軒の下に猫
春昼の郵便受けにチラシのみ
沼尻のあたり菜の花まつ盛り
はくれんの空なり暮るる頃となり
坂道をからすおりゆく春隣
土手に雉ゐて川上へ風少し

土佐水木

根橋宏次

冬たんぽば乗馬クラブの柵ひかり
 まんさくのあたりでバスを降りにけり
 コーヒーの出てゐる卓のヒヤシンス
 石段の下にミモザの咲く茶房
 畦焼の煙をもろにくらひけり
 北窓を開きイーゼル立てにけり
 風船の入りゆく漫画博物館
 雪形のくづれてゐたる花ゆすら
 舳を叩いて散らす春の雑魚

通らせてもらふ校庭土佐水木

白 梅

きくちきみえ

白梅の辺りに闇の来てゐたる
箸立てに箸匙フオーラク寒明くる
豆まきの豆は襖に弾かるる
暮れやうとする商店街にゐて二月
木漏れ日のなかに春の日のひとつ
薄氷の融ける寒さのありにけり
三叉路に空き地空き地に花辛夷
春の草抜く大方は根の重さ
雨粒は繁縷の花に落ちにけり
梅の香の寺ぬけ魚買ひにゆく

ミモザ咲く

大島英昭

枯れ園に水道栓とゴムホース
春近し櫟の幹に日があたり
土ぼこり立てて雌雉子がつつ走る
春浅き畑にドラム缶鑄びて
切り岸の上を人ゆく蝌蚪の紐
自転車を置いて蓬を摘んでゐる
県道に出ればコンビニ春めけり
引つ越しのトラックミモザ咲く家に
積まれたる丸太新し山笑ふ
紙くづがひとつ光つて土手あをむ

團子屋

丑久保勲

専用車でピアノを運ぶ春隣
白梅は阿像の上に枝広げ
吽像は紅梅の香に包まれて
二月堂へ続く坂道梅の花
盆梅や電話ルームのあるカフエ
画材店のビーナス像に春日差す
春の海大桟橋の突端の
エレベーターはすべて上へと春一番
モンブランを買っておまけの紙雛
団子屋の甕に活けられ桃の花、

ばんがさ集

朝の月冬の富士へと沈みけり
雪柳廣瀬雅男

春めくや子等は砂場に山つくる
星ひとつ見ゆる夜空や猫の恋
石段の先も石段梅の花

下萌えや杭ひとつ立つ砦跡

春なかば開け放たれし艇庫かな
まんさくや経の聞こゆる昼の寺

茎立ちや土手を斜めに登る人
ベランダの素焼きの鉢に黄水仙

川風の届くところに雪柳

桃の花

渡邊孝彦

桜木の瘤の小枝に冬芽かな
力一カバー風に膨れて仏の座
トラックに土載せてくる春隣
ルージュだけのマネキンの顔寒明ける
余寒なほ高架の駅で電車まつ
高台の芽吹く木立てかくれんぼ
鳥の巣の藁が木の根にこぼれをり
石段の下の水辺の水温む
雨しづく芽立ちの枝にふくれけり
桃の花咲いて青空駐車場

土手の道

瀬島酒望

春 近 き 養 鷄 場 に 卵 買 ふ
クルトンの浮かぶボタージュ春うらら
馬 酔 木 咲 く 庚 申 様 を 祀 る 坂
梅 日 和 溜 り 醬 油 の 焼 き 団 子
踏 切 が あ り 草 あ を む 土 手 の 道
豚 小 屋 の 窓 開 い て み る 春 の 昼
旧 道 に 入 り て 行 き 遇 ふ 農 具 市
う ら ら か や 木 つ 端 の 浮 か ぶ 舟 だ ま り
囀 り の 庭 に 野 点 の 準 備 中

囁
り
の
庭
に
野
点
の
準
備
中

野火埃

青谷小枝

縁側に猫がねてゐる枇杷の花
参道に昨夜のつひなの豆あちこち
町中の蕎麦屋の卓の野火埃
母の家に母を思へば春の雪
春や衿に小花のピンバッジ
芽柳や古地図のままに堀曲りで
本棚の一一番下の春の闇
会席の最後小ぶりのさくらもち
花しぶし雨たたへつつこぼしつ

春の雨

安藤久美子

啓蟄の日のトーストの狐色
チャイム鳴るもう降り出して春の雨
霾ぐもりコントラバスのケース行く
鉄棒に触れて卒園リボンの子
スキップは蒲公英の花踏まぬやう
大皿の料理に加へ花菜漬
コンパクトミラーに映る春の雲
階段を降りれば水辺木の芽風
蝶の来て空の高みへまたたくま
買ふまへに指で回して風車

藤井美晴

春 寒

冬 晴れのビルの天辺鳥ゐる
城ヶ島大根壳りに雨が降る
料峭の窓を開けば海のこゑ
ボイラーにボンと火がつく寒の明け
春寒の無聊を又の「數の中」
ひとしめり来て明け方の暖かき
きさらぎの青空を航くプロペラ機
塩味のいささか強き目刺し食ふ
春日濃し殊に頭の天辺に
青空の辛夷の花がくづれけり